



個人の命を優先し 地域全体で津波の犠牲者を出さない



徳島県美波町阿部自主防災会
事務局長 瀬戸 興宣

1 はじめに

阿部地区は四国の東端の蒲生田岬から室戸側に少し下がった所で、三方が山に囲まれ夏はアワビ漁、冬は伊勢海老漁が盛んな漁村で、人口 218 人高齢化率 55.5% で、住民の高齢化と過疎化が課題です。過去に阿部地区では津波による大きな被害の言い伝えや痕跡もなく、津波無縁の意識が充満していました。東日本大震災の後、全国に先駆けて徳島県が出した津波暫定予測では、阿部港が一番高い 20.2 m の津波、まるで全国で一番の津波が押し寄せるかの様な印象と驚きを住民達に与えました。

2 20mならそれより高い所に避難!

明日にも東日本大震災の様な津波が阿部地区を襲ってくるかも知れない恐怖は住民の行動として即現れ、地域の何処からでも回りの

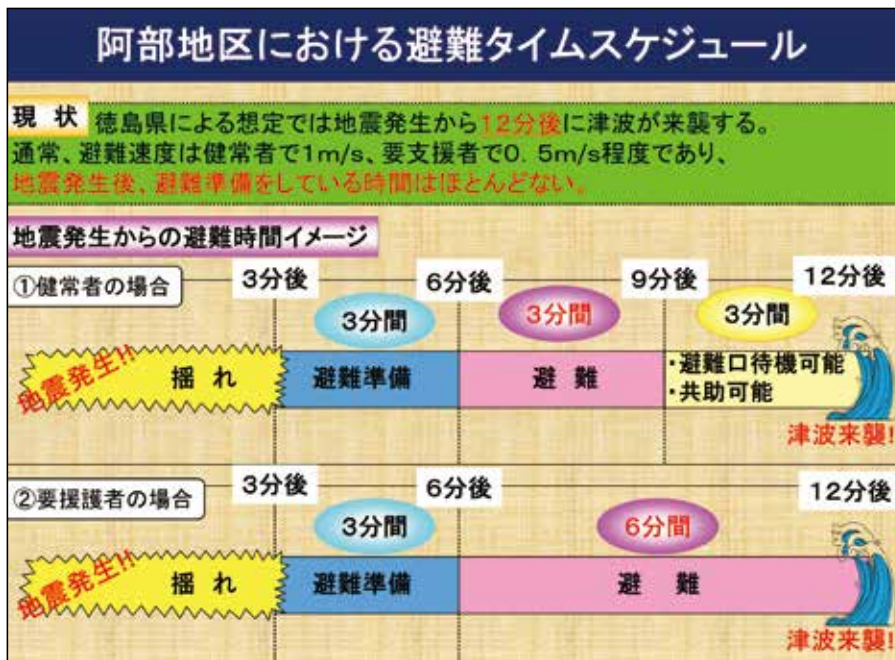
山に登ることができる様に手作りの避難路を造りました。資金不足の中、古いロープや立木を上手く利用して造り上げた避難路は既存の道路を含め 23 本、汗と努力の結晶で、何時しかマイ避難路と呼ばれる様になりました。

全ての避難路は地域の背後を迂回している県道に繋ぎ、災害時は一方通行で 20 m 超の県道に上がれる様にしてあります。避難路は櫛型にしてあることで、住民は避難路を進むと集合地点に集まれる仕掛けとなっています。

また、避難路の 20 m 地点には海拔 20 m 表示とバッテリー付き防犯灯を設置してあります。例え暗闇の中でもセフティーラインが分かり頑張りの目標となっています。謂わば現代版の濱口梧陵「稲むらの火」となっています。

3 個人努力と地域の役割の分担

地震発生後の 12 分後には津波の影響が出だ



すと言われている美波町です。高齢者率50%地域としては津波避難の援助を必要とする人が数多く居る現状であり、今後もその傾向は段々と悪化していくものと推測されます。

阿部地区では個人の命を優先しながら住民全体で津波での犠牲者を出さない為に避難タイムスケジュールを作成しています。考えの基準にしているのは避難口（生活圏と避難路の接点）を、津波の影響が出だす12分後に全住民が通過することを目標にしています。避難の早さは健常者で1秒1m、要支援者で2秒1mで考えて、自宅から各避難口までの距離が分かれば時間計算ができます。阿部地区で条件の善し悪し混ぜて平均すると各家々から避難口までは3分で移動が可能です。

南海地震の揺れは3分位と予測されていますが、要支援者は避難口までに健常者の倍の6分間が必要となりますから、避難準備に充てられる時間は残りの3分と言うことです。津波が港に来るまでの12分間を3分ごとの避難行動に分けて考えています。

①「地震の後直ぐ」では個人の時間認識に差があり準備の時間が明確でない。3分以内に避難行動を開始すると統一することで、3分間で出来る事柄が分析出来ます。高齢者は身支度をするのが限度でしょう。そこで、高齢者の荷物は事前に高台防災倉庫で預かっています。

②避難は競争ではありません。競争なら若い人だけが助かります。阿部地区では時間が無いので、個々に要支援者を迎えに行くことが出来ないのも、避難口までは自力で若しくは家族や近所の人が同行避難し、階段や坂道の多い避難路は避難口で待機している健常者が応援をする様にルール化しています。当然、急勾配でも使用出来るオリジナル製の布担架等の避難用具を避難口に設置しています。避難開始時間を3分以内とすることで健常者は避難口で3分の待機可能時間が出来、この時間を避難支援いわゆる共助に充てる事が出来るので、自分の避難路を確保したうえで、

災害弱者の支援が可能というルールが成り立ちます。

③3分間で健常者の移動は約180mと言うことになりますと、高齢者が180mを休憩無しに歩けることが必須条件になります。シルバーカーも使えると避難口までは、ほぼ健常者なみの避難が可能になります。阿部地区では夕方になると高齢者達は休校中の小学校グラウンドに集まり、体力維持の為に自主的な歩行訓練をしています。

4 備蓄と備え

海岸沿いで隣接集落は東西とも10km以上離れており、災害時の孤立、平時の病人の搬送にも困難があり、平成29年3月に念願のヘリポートが防災広場に隣接した用地に完成しました。

防災倉庫には常時交流電源が引き込まれていて無線機の充電器、調味料や預かり薬品の保管の為に冷蔵庫が設置されています。また、現在4日分の避難食を確保していますが、たんぱく質を摂取する為に赤飯（豆ご飯）やお味噌の備蓄が目立ちます。これは防災食+味噌汁の炊き出しを意識したものです。

5 防災くるま座女性塾を開催

避難所での生活となると女性陣の活躍すること大であり、昨年から40歳代・50歳代・60歳代の女性に限定した「防災くるま座女性塾」と称したワークショップを開催しました。

昨年は感染症等の健康衛生問題、今年度は身近な要支援者の避難生活について意見交換をしました。今年はトイレの問題、自力避難者の体力問題、緊急医療の情報把握の3点がクローズアップされ、来年は50歳からの栄養問題をテーマにすることにしました。

時間と共に災害の怖さが風化しつつある様に思います。止まることなく今出来ることを進めて行きたいと思っています。